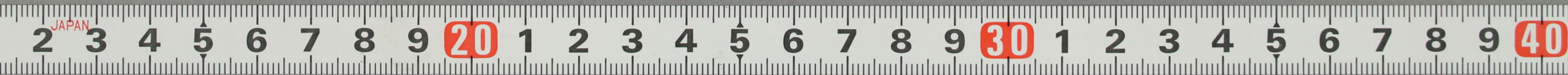
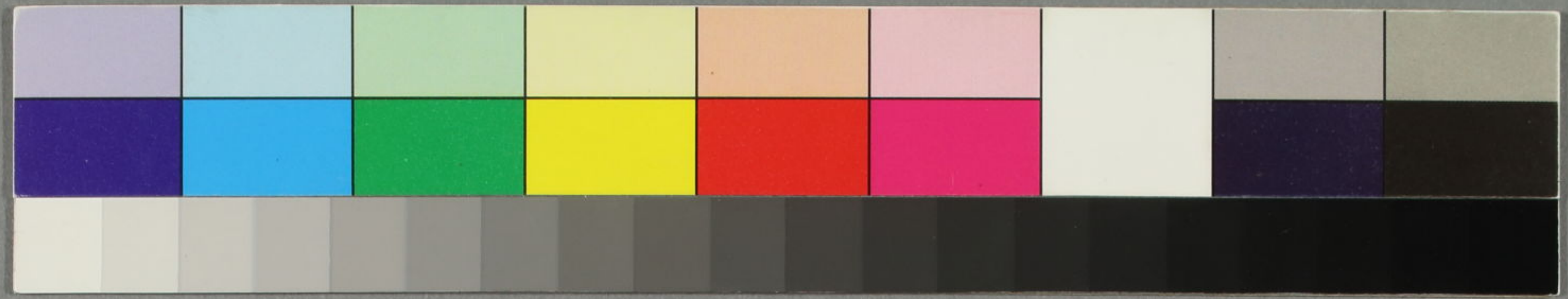


役者評判記

子13  
8849  
109

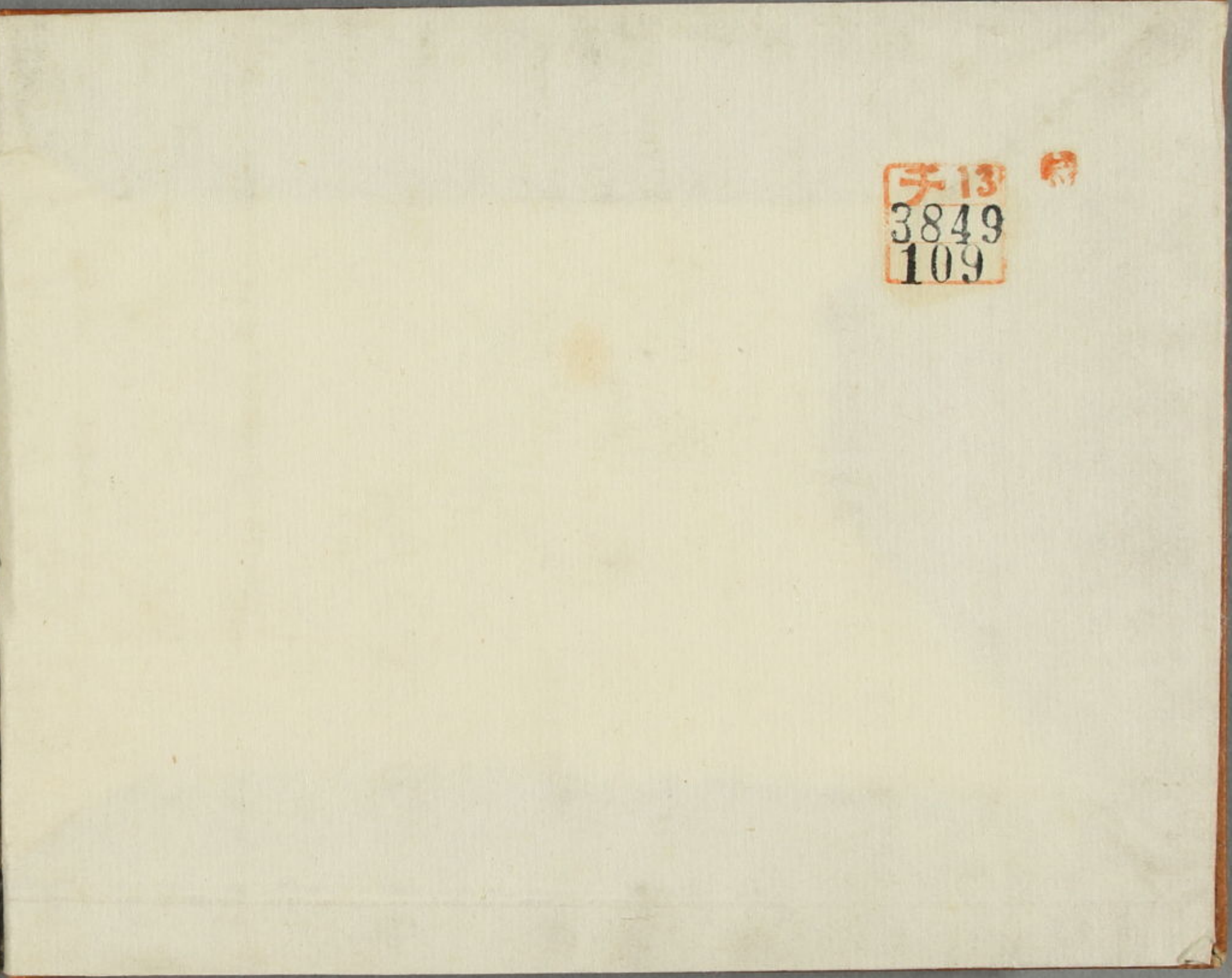




嘉永  
四年

後者清柳系  
京上

多  
13  
20



多  
13  
3849  
109



門子 13  
巻

後有清辨系

後永定

系大坂の目錄

親

親の縁成

新製器之商納

校

校之入清之あふ  
見物のお慰了

古尖を以て新しう

車之序の二重受

一重受ははこ大入

名代の白界を寄る

徳田之序の神

神あまのよの

精

宗

宵の内にうら玉次郎と云ふ  
四條河原へ見物の山崎

枕車のうけ聲人々や  
こむせ一人は持重不

見廻るものせし物神樂を能く  
勢ひひきこさるゝと

さし止る曲持の移る  
傍傍のふきまは後の名物

お節楽万々お節楽の  
祝言よりこれおと

見物の色見紙より  
若顔場の芝居の旗ひ

系太鼓大鼓は奴奴若目録

系太鼓小鼓は系太鼓代 早稲長太夫  
巻巻系系

大鼓角之芝居 系代大鼓太鼓  
市川系系

○見太鼓系系 のり太鼓

△はやくあつ体と云は流流の如く

▲五段巻頭 わく

▲五段巻油 和歌系

▲五段巻尾 角

▲五段巻部 角

▲五段巻寛 角

▲五段巻上 角

いせのうら玉の如く山崎系

女形と云ふことこぼの玉は清系

上上吉

竹園秋童 △

と水といひか女中此候は葵系

上上吉

嵐彦彦 角

彦彦切が丸くまやうに候は葵系

上上吉

市川當外 △

河後と成ても極云ハ素系

上上吉

尾上松壽 △

松壽の土系は物ごう葵系

上上吉

三井梅全 小

梅全の仕候はとつじに葵系

上上吉

中村嘉助 △

久この河後候は葵系

上上吉

法村源三助 小

とつじとつじめが葵系

上上吉

中山文七 △

お名やううん祥おが葵系

上上吉

三井源三助 小

お殺はとつじとつじ大系

上上

中村後助 小

親のち候はヒイキが葵系

上上

嵐興市 △

とつじとつじあつじとつじ葵系

上上

市川市十郎 南

とつじとつじあつじとつじ葵系

尾上多磨彦 角

とつじとつじあつじとつじ葵系

中村嘉助 南

中村嘉助 △

上上

嵐橋次郎 △

中村三郎 山

SSRも種々の仕立の白くぬ襦袢

市川新太郎 角

三橋大次郎 山

市川初太郎 △

片尾我之助 △

先見海一のよふき海系

三橋他人 山

中村秋太郎 △

片尾我之助 △

尾上栄三郎 △

片尾栄三郎 △

嵐芳三郎 角

市川三郎 △

上上

片尾我之助 △

浅尾市松 △

尾上和市 △

実川延次 △

市川助之助 △

嵐冠三郎 山

それらのりあめりあら山系

嵐右之助 △

尾上多分全郎 角

嵐楠彦 山

中村金又郎 △

尾上多分全郎 角

実川延次郎 △

片尾柳彦 △

嵐佐太郎 角

上上

市川桂之助 小

実川実之助 △

三井増又希 小

沢村松之助 △

嵐隆又希 角

浅尾実希 小

嵐五右衛門 角

嵐友助 日

三井源之 小

いづれもより目と松の尾象

正三井三之助 小 一上 実川内之助 小

正中山栄三 日 一上 実川中蔵 日

正中山仲介 日 一上 嵐九保 日

切上吉 小川春之希 小  
中山百花 日

いづれもより目と松の尾象

一上 中村友二 小 一上 中村桂之助 小

一上 中村徳之助 日 一上 中村仲八 日

一上 嵐春之希 日 一上 中村彦次 日

▲五役後見

至上吉 市川助壽希 角

徳人が皆さるるが 和利の希

▲実悪巻巻頭

至上吉 所園市彦 △

ゆ後とてめてのりままたま勢自象

▲実西歌後道外之希

至上吉 中村友三 小

徳人が後とてつる山科の山伏象

至上吉 山嵐冠十希 小

具言やくとらん物が皆ゆふ象

上上吉 姉川新屋 角

めくいの中よわくしお金ひき

上上吉 市川市友 角

ゆげとて成てもよるよ余り

上上吉 宝徳定方 角

此方とていふこと成る

上上吉 大谷廣方 角

おろしとていふこと成る

上上吉 中村仲茂 角

おろしとていふこと成る

上上吉 津尾内通 角

おろしとていふこと成る

上上吉 三井久吉 角

おろしとていふこと成る

上上吉 坂東八又 角

上上吉 中村桂車 角

おろしとていふこと成る

実川大八 角

中村秋吉 角

実川龍彦 角

実川栄彦 角

市川助六 角

中村車九 角

中山英男 角

中村共市 角

大谷了十 角

嵐大十郎 角

上上

おろしとていふこと成る



上上

- 尾上松丸 角
- 中村豹助 小
- 中山百彦 △
- 市川團次 △
- 市川助五郎 角
- 市川市丸 △
- 市川実右衛門 小
- 笠谷九左 △
- 市川松十郎 △
- 中村登助 △
- 市川森助 △
- 中村慈次郎 角

海老川とて困てとて空糸

上上

- 中村甚次郎 角
- 市川新車 △
- 中山三右衛門 △
- 浅尾五六 △
- 浅尾内又郎 △
- 市川松右衛門 △
- 坂東流助 △
- 市川九郎 △

海老川とて困てとて空糸

▲実悪巻巻

太上吉

浅尾其六 △

十と六取二依乃ちるたて系

▲若女形之郎

太上吉

中山勇枝 小

あてりてとて困てとて空糸

上上吉 崑三志の 角

かすかへあわくし山田村

上上吉 中村大表 小

はるまのねがむれをうら福寿

上上吉 実川南の節 小

藤のたねのまきまき河系

上上吉 市川斎参意 △

こぢ付めよりつわりの口の系

上上吉 中村千之助 角

かこあはさまをか橋の系

上上吉 川長巻の筋 △

かこあはさまのさく神楽系

上上吉 中山一徳 △

はねのちとろい 右飯系

上上吉 尾上実彦 小

上上吉 中村梅花 日

よの仕出をきくり大津系

崑 栢塚 角

後川八翁 △

中山とみさ △

中村秋保世 小

浅尾重枝 日

いづれも風俗のよき橋系

崑 藤久 小

中村常盤 △

後川八太郎 △

中村徳之助 △

中村琴三郎 △

尾上松光 △

上上

嵐三務 角

山下宜世 △

津川路之助 角

中村榮三郎 角

尾上松之丞 角

嵐勝登 角

嵐勝由 角

中村秋常 △

姉川とあこ △

河三春 △

中村勝春 △

これもおまのらるる番の家

一上中ゆりまゆ一上 安川重尾の

一上中ゆりまゆ一上 中村榮三女曰

一上中村とまは日一上中村安勝曰

上上

山下金作 角

おはまのらるる番の家

▲若女形別頭

真上書 中村秋六 △

おはまのらるる番の家

▲角髪娘形後之部

上上 市川市巻 角

おはまのらるる番の家

上上 三井福丸 日

おはまのらるる番の家

上上 中村栞巻 日

おはまのらるる番の家

市川米巻 △

市川森代巻 角

中村政次巻 △

上上

芳沃園糸糸 山  
 市川白菘 山  
 中西乐之助 山  
 三升堂三糸 山  
 市川猿之助 山  
 市川高藤猿 山  
 中村養之助 山  
 中村富之助 山  
 実川延之助 山  
 市川猿松 山  
 所尾崎之助 山  
 市川乙之助 山  
 尾上清松 山  
 中村豹之助 山  
 所尾秋子 山

実川延之助 山

いづれもちのこ達のいづれも初年衆

上上 中村玉七 日

お名まとのひ老りくや生糸

一上 中村芝丸 山  
 一上 実川延之助 山  
 一上 中村家子 山  
 一上 市川糸之助 山  
 一上 実川新市 山  
 一上 所尾秋市 山  
 一上 市川玉猿 山  
 一上 三升亀房 山

▲若女形惣後見

大極書 中村富太郎 山

上上へはとのろろ 祇屋系

▲頭取之部

中村富太郎 山

市川團六 角

中村万六日

尾上友助 菊六

中村富太郎 少六

中村安五郎 少六

中村榮三郎 日

中村龍三郎 日

中村多太郎 菊六

惣後見

大櫻書

徳少成ひびく 天祚祭

▲雛子方々部

水例の程

一 張 玉村参之樂 一 張 中村兵派

一 張 中村新三郎 一 日 富田千代

一 日 拵屋依之助 一 張 拵屋右之丞

一 日 中川百菊 一 張 中村慶七

一 日 石田春三郎 一 日 清水春成

一 日 篠田右之丞 一 張 拵屋正隆

一 張 廣川定次郎 一 張 世家吉六助

一 張 山村友之丞 一 日 中村榮三郎

一 張 行幸安右左夫 一 張 露伏笑男

一 日 行幸勇方夫 一 日 露伏忠助

一 日 行幸富方夫 一 日 矢沢安七

南劍ノ程

一 張 中村千代 一 張 行幸勢斎夫

一 張 拵屋東隆 一 張 拵屋安造

一 日 坂东定次郎 一 日

角ノ程

一 張 中村統口郎 一 張 行幸松太夫

一 日 美房半七 一 日 行幸書卷夫

一 張 坂东定次郎 一 張 川伏小市

一 日 拵屋依之助 一 日 川伏安七

▲狂言能者之部

並木左衛門

金史朗

小

成 約 七

桑 雄 彦 助

三 桑 笑 次 助

並 木 家 次 介

宗 河 龜 助

清 水 正 七

二 桑 家 助

金 沢 松 尾 助

実 井 辰 助

側

の

清 水 正 七

産

横 巻 八 十 助

八 文 會 桑 雄

菊 例 之 産

成 田 邦 助

宗 河 堂 助

木 崎 延 助

角 之 産

松 尾 亭 助

千 手 聖 万 宗

大 一 付 下









一初者とて又殿時記の事と痛くは後  
程中分の事なりと盛んは流成り中を  
とて流成りとていふ事ありとていふ

〔三〕この所の取心志賀殿行は遠く物をも  
中村の事なりとて地自命は合時なり  
老切なりとていふ事ありとていふ

行はとていふ事ありとていふ事あり  
和記を又事とていふ事ありとていふ  
は物なりとていふ事ありとていふ

〔四〕二段はく本所合三指山辰院若殿  
史の事なりとていふ事ありとていふ  
後茶も物とていふ事ありとていふ

とていふ事ありとていふ事ありとていふ  
とていふ事ありとていふ事ありとていふ  
とていふ事ありとていふ事ありとていふ

〔五〕切廓事とていふ事ありとていふ  
の事ありとていふ事ありとていふ  
とていふ事ありとていふ事ありとていふ

〔六〕切廓事とていふ事ありとていふ  
の事ありとていふ事ありとていふ  
とていふ事ありとていふ事ありとていふ

〔七〕切廓事とていふ事ありとていふ  
の事ありとていふ事ありとていふ  
とていふ事ありとていふ事ありとていふ

五段巻巻

大上上吉 〇尾上多見院 前見

〔八〕切廓事とていふ事ありとていふ  
の事ありとていふ事ありとていふ  
とていふ事ありとていふ事ありとていふ

津 卷十

物念く去妻行方海舟其船は出動一各々發  
浪<sup>二</sup>要<sup>一</sup>書<sup>三</sup>切<sup>四</sup>角<sup>五</sup>打<sup>六</sup>船<sup>七</sup>作<sup>八</sup>万<sup>九</sup>船<sup>十</sup>中<sup>十一</sup>分<sup>十二</sup>分<sup>十三</sup>分<sup>十四</sup>分<sup>十五</sup>分<sup>十六</sup>分<sup>十七</sup>分<sup>十八</sup>分<sup>十九</sup>分<sup>二十</sup>分<sup>二十一</sup>分<sup>二十二</sup>分<sup>二十三</sup>分<sup>二十四</sup>分<sup>二十五</sup>分<sup>二十六</sup>分<sup>二十七</sup>分<sup>二十八</sup>分<sup>二十九</sup>分<sup>三十</sup>分<sup>三十一</sup>分<sup>三十二</sup>分<sup>三十三</sup>分<sup>三十四</sup>分<sup>三十五</sup>分<sup>三十六</sup>分<sup>三十七</sup>分<sup>三十八</sup>分<sup>三十九</sup>分<sup>四十</sup>分<sup>四十一</sup>分<sup>四十二</sup>分<sup>四十三</sup>分<sup>四十四</sup>分<sup>四十五</sup>分<sup>四十六</sup>分<sup>四十七</sup>分<sup>四十八</sup>分<sup>四十九</sup>分<sup>五十</sup>分<sup>五十一</sup>分<sup>五十二</sup>分<sup>五十三</sup>分<sup>五十四</sup>分<sup>五十五</sup>分<sup>五十六</sup>分<sup>五十七</sup>分<sup>五十八</sup>分<sup>五十九</sup>分<sup>六十</sup>分<sup>六十一</sup>分<sup>六十二</sup>分<sup>六十三</sup>分<sup>六十四</sup>分<sup>六十五</sup>分<sup>六十六</sup>分<sup>六十七</sup>分<sup>六十八</sup>分<sup>六十九</sup>分<sup>七十</sup>分<sup>七十一</sup>分<sup>七十二</sup>分<sup>七十三</sup>分<sup>七十四</sup>分<sup>七十五</sup>分<sup>七十六</sup>分<sup>七十七</sup>分<sup>七十八</sup>分<sup>七十九</sup>分<sup>八十</sup>分<sup>八十一</sup>分<sup>八十二</sup>分<sup>八十三</sup>分<sup>八十四</sup>分<sup>八十五</sup>分<sup>八十六</sup>分<sup>八十七</sup>分<sup>八十八</sup>分<sup>八十九</sup>分<sup>九十</sup>分<sup>九十一</sup>分<sup>九十二</sup>分<sup>九十三</sup>分<sup>九十四</sup>分<sup>九十五</sup>分<sup>九十六</sup>分<sup>九十七</sup>分<sup>九十八</sup>分<sup>九十九</sup>分<sup>百</sup>分

角<sup>一</sup>領<sup>二</sup>登<sup>三</sup>乘<sup>四</sup>掃<sup>五</sup>山<sup>六</sup>回<sup>七</sup>軍<sup>八</sup>助<sup>九</sup>卷<sup>十</sup>空<sup>十一</sup>原<sup>十二</sup>後<sup>十三</sup>芝<sup>十四</sup>露<sup>十五</sup>草<sup>十六</sup>草<sup>十七</sup>草<sup>十八</sup>草<sup>十九</sup>草<sup>二十</sup>草<sup>二十一</sup>草<sup>二十二</sup>草<sup>二十三</sup>草<sup>二十四</sup>草<sup>二十五</sup>草<sup>二十六</sup>草<sup>二十七</sup>草<sup>二十八</sup>草<sup>二十九</sup>草<sup>三十</sup>草<sup>三十一</sup>草<sup>三十二</sup>草<sup>三十三</sup>草<sup>三十四</sup>草<sup>三十五</sup>草<sup>三十六</sup>草<sup>三十七</sup>草<sup>三十八</sup>草<sup>三十九</sup>草<sup>四十</sup>草<sup>四十一</sup>草<sup>四十二</sup>草<sup>四十三</sup>草<sup>四十四</sup>草<sup>四十五</sup>草<sup>四十六</sup>草<sup>四十七</sup>草<sup>四十八</sup>草<sup>四十九</sup>草<sup>五十</sup>草<sup>五十一</sup>草<sup>五十二</sup>草<sup>五十三</sup>草<sup>五十四</sup>草<sup>五十五</sup>草<sup>五十六</sup>草<sup>五十七</sup>草<sup>五十八</sup>草<sup>五十九</sup>草<sup>六十</sup>草<sup>六十一</sup>草<sup>六十二</sup>草<sup>六十三</sup>草<sup>六十四</sup>草<sup>六十五</sup>草<sup>六十六</sup>草<sup>六十七</sup>草<sup>六十八</sup>草<sup>六十九</sup>草<sup>七十</sup>草<sup>七十一</sup>草<sup>七十二</sup>草<sup>七十三</sup>草<sup>七十四</sup>草<sup>七十五</sup>草<sup>七十六</sup>草<sup>七十七</sup>草<sup>七十八</sup>草<sup>七十九</sup>草<sup>八十</sup>草<sup>八十一</sup>草<sup>八十二</sup>草<sup>八十三</sup>草<sup>八十四</sup>草<sup>八十五</sup>草<sup>八十六</sup>草<sup>八十七</sup>草<sup>八十八</sup>草<sup>八十九</sup>草<sup>九十</sup>草<sup>九十一</sup>草<sup>九十二</sup>草<sup>九十三</sup>草<sup>九十四</sup>草<sup>九十五</sup>草<sup>九十六</sup>草<sup>九十七</sup>草<sup>九十八</sup>草<sup>九十九</sup>草<sup>百</sup>草

あてしほし合く松林の初よりく 〔註〕これ  
うりなきをききしは此勸草の流おるをうり  
門他の方徳流重の清文をうり 〔註〕此方  
見と用ひし姉妹をうり 〔註〕此方  
内中分り切懐身 〔註〕此方  
成と余の程をうり 〔註〕此方  
多かれと中其程は切懐身 〔註〕此方  
大は切懐身の場 〔註〕此方  
二方の出と入 〔註〕此方  
と安ん 〔註〕此方  
此は 〔註〕此方  
清り 〔註〕此方

▲三後之部

上上吉  鼠薄寛 角社

〔註〕此は 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方

此八葉村共 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
積城 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
後 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
あり侍 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
中分 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
後若 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
捨別 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
あひ 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
見物 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
後若 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方  
が 〔註〕此方 〔註〕此方 〔註〕此方

名長や山三太は侍り相傳然に後叙女毎夜の  
 お勤も後より後 切 在村の事と捕らるる  
 云々 其 七ね系別考成生勤不を所規  
 中野庵之侍り終總大増信乃大増村の  
 後子供に依りて後父行他村を死と云々  
 云々 川 西切子長考娘おさん  
 かね後評よおきと云々 其 六分  
 初り南野村に父標と推考有る 其 品  
 人おと云々 其 品  
 圓利の方より集りて近中分 切 方 奄室の  
 辰心乃村川を流る岩谷始て云々 其 品  
 ねらう 其 品  
 て 其 品  
 中 其 品

二後野井又此世場所北村云々侍り後巻  
 室 其 品  
 ねらう 其 品  
 云々 其 品  
 後 其 品  
 流 其 品  
 云々 其 品  
 侍 其 品  
 官 其 品  
 の 其 品  
 云々 其 品  
 出 其 品  
 云々 其 品  
 云々 其 品  
 云々 其 品

上上吉 其 品 實川延三節 其 品

既而後以變為時の義方井筒其は義孝を并

にて 佐と云ふを義孝とす 既 去り中の子

之をいふ義孝は其は佐と云ふ義孝は其は佐と云ふ

既 切 去り後年と其は中の子

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

其は中の子と云ふを其は中の子と云ふ

已後同と今ありてはまゝに申命く [切] 切家  
 事は後七段 [善] 善事も勸め今後には後  
 上と云其目より其 [一] 一信を業よりして其  
 事ありて今に七段七下も事ありて大あり  
[二] 二段の事 [三] 三段の事 [四] 四段の事 [五] 五段の事 [六] 六段の事 [七] 七段の事  
 出ぬ方徳に於ては其 [八] 八段の事 [九] 九段の事 [十] 十段の事 [十一] 十一段の事  
 後を信を其 [十二] 十二段の事 [十三] 十三段の事 [十四] 十四段の事 [十五] 十五段の事  
 ありて今に [十六] 十六段の事 [十七] 十七段の事 [十八] 十八段の事 [十九] 十九段の事 [二十] 二十段の事  
 事の信内事 [二十一] 二十一段の事 [二十二] 二十二段の事 [二十三] 二十三段の事 [二十四] 二十四段の事  
 事の信内事 [二十五] 二十五段の事 [二十六] 二十六段の事 [二十七] 二十七段の事 [二十八] 二十八段の事  
 ありて今に [二十九] 二十九段の事 [三十] 三十段の事 [三十一] 三十一段の事 [三十二] 三十二段の事  
 事の信内事 [三十三] 三十三段の事 [三十四] 三十四段の事 [三十五] 三十五段の事 [三十六] 三十六段の事  
 ありて今に [三十七] 三十七段の事 [三十八] 三十八段の事 [三十九] 三十九段の事 [四十] 四十段の事  
 事の信内事 [四十一] 四十一段の事 [四十二] 四十二段の事 [四十三] 四十三段の事 [四十四] 四十四段の事  
 ありて今に [四十五] 四十五段の事 [四十六] 四十六段の事 [四十七] 四十七段の事 [四十八] 四十八段の事  
 事の信内事 [四十九] 四十九段の事 [五十] 五十段の事

同はる事ありて [一] 一信を業よりして其  
 事ありて今に [二] 二信を業よりして其  
 事ありて今に [三] 三信を業よりして其  
 事ありて今に [四] 四信を業よりして其  
 事ありて今に [五] 五信を業よりして其  
 事ありて今に [六] 六信を業よりして其  
 事ありて今に [七] 七信を業よりして其  
 事ありて今に [八] 八信を業よりして其  
 事ありて今に [九] 九信を業よりして其  
 事ありて今に [十] 十信を業よりして其  
 事ありて今に [十一] 十一信を業よりして其  
 事ありて今に [十二] 十二信を業よりして其  
 事ありて今に [十三] 十三信を業よりして其  
 事ありて今に [十四] 十四信を業よりして其  
 事ありて今に [十五] 十五信を業よりして其  
 事ありて今に [十六] 十六信を業よりして其  
 事ありて今に [十七] 十七信を業よりして其  
 事ありて今に [十八] 十八信を業よりして其  
 事ありて今に [十九] 十九信を業よりして其  
 事ありて今に [二十] 二十信を業よりして其  
 事ありて今に [二十一] 二十一信を業よりして其  
 事ありて今に [二十二] 二十二信を業よりして其  
 事ありて今に [二十三] 二十三信を業よりして其  
 事ありて今に [二十四] 二十四信を業よりして其  
 事ありて今に [二十五] 二十五信を業よりして其  
 事ありて今に [二十六] 二十六信を業よりして其  
 事ありて今に [二十七] 二十七信を業よりして其  
 事ありて今に [二十八] 二十八信を業よりして其  
 事ありて今に [二十九] 二十九信を業よりして其  
 事ありて今に [三十] 三十信を業よりして其  
 事ありて今に [三十一] 三十一信を業よりして其  
 事ありて今に [三十二] 三十二信を業よりして其  
 事ありて今に [三十三] 三十三信を業よりして其  
 事ありて今に [三十四] 三十四信を業よりして其  
 事ありて今に [三十五] 三十五信を業よりして其  
 事ありて今に [三十六] 三十六信を業よりして其  
 事ありて今に [三十七] 三十七信を業よりして其  
 事ありて今に [三十八] 三十八信を業よりして其  
 事ありて今に [三十九] 三十九信を業よりして其  
 事ありて今に [四十] 四十信を業よりして其  
 事ありて今に [四十一] 四十一信を業よりして其  
 事ありて今に [四十二] 四十二信を業よりして其  
 事ありて今に [四十三] 四十三信を業よりして其  
 事ありて今に [四十四] 四十四信を業よりして其  
 事ありて今に [四十五] 四十五信を業よりして其  
 事ありて今に [四十六] 四十六信を業よりして其  
 事ありて今に [四十七] 四十七信を業よりして其  
 事ありて今に [四十八] 四十八信を業よりして其  
 事ありて今に [四十九] 四十九信を業よりして其  
 事ありて今に [五十] 五十信を業よりして其





京四條北側之居  
 花街獲探劇雜妻  
 早並長六夫  
 連谷榮之丞



鬼法眼三略卷



御所櫻堀川夜討



切狂言廓父草



音 京下

しりるるに [書] 後清形より行はめり  
よりおのぼりて入るるをのぼりて幕切作  
る内は後清形より入る類をれ万助方の  
信望の重なる老後形切者こがら申威  
ふまより二條付付と想言評あまうり  
つるるに向き後大言評命く [功] 切作  
始ま書をよむ後形切者く [書] 十月  
八陣より冠者か城形 [書] 今少し  
より [功] 十 [書] 長下好く  
下を [書] 長下好く [功] 長柳好く  
乃同じ幕切なる [功] 後形  
出谷より [功] 後形 [功] 後形  
神より [功] 後形 [功] 後形  
と神より [功] 後形 [功] 後形  
と [功] 後形 [功] 後形

の [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
う [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
切 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
中 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
下 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
件 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
コナ [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
上上吉 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
鼠 角  
別 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
別 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
廓 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形  
和 [功] 後形 [功] 後形 [功] 後形

野の東の邊に有る塚本頼 [書名] のごころの  
てまを後世に傳へたる事あり [記]

又月形之傳書に勅書あり [記]

三浦亦八大将之合議大助大塚信房 [記]

其書に [記]

八月 [記]

亦 [記]

を [記]

小 [記]

と [記]

倫 [記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

上上吉 市川苗姓

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

[記]

凡果一切もまて三河也史と春史合ひりて  
必ひ外内自余の國をまて政分信考最  
西河也新六中よりとをれすこと此の如し  
三河也史の如くは中河也史の外也其れ信  
考六河也其れ史をまて其れをの計大なる  
凡果史の如くは中河也史と春史合ひりて  
とまて三河也

上上世回 尾上松壽寺 △

凡果史の如くは中河也史と春史合ひりて  
必ひ外内自余の國をまて政分信考最  
西河也新六中よりとをれすこと此の如し  
三河也史の如くは中河也史の外也其れ信  
考六河也其れ史をまて其れをの計大なる  
凡果史の如くは中河也史と春史合ひりて  
とまて三河也

凡果史の如くは中河也史と春史合ひりて  
必ひ外内自余の國をまて政分信考最  
西河也新六中よりとをれすこと此の如し  
三河也史の如くは中河也史の外也其れ信  
考六河也其れ史をまて其れをの計大なる  
凡果史の如くは中河也史と春史合ひりて  
とまて三河也

上上世回 三折柳舎

凡果史の如くは中河也史と春史合ひりて  
必ひ外内自余の國をまて政分信考最  
西河也新六中よりとをれすこと此の如し  
三河也史の如くは中河也史の外也其れ信  
考六河也其れ史をまて其れをの計大なる  
凡果史の如くは中河也史と春史合ひりて  
とまて三河也

まのきくしをてきりし 上 系抄也

上上正 (丸) 中村房助 △

房助 房助先の并きま後後とては毛利出  
門の女玉のち若初米女が女要天三浦上縁  
く女とのね終りく以廓清成る後其女百性源  
は二級より終り玉助等十三回と天正年中終  
り此勤地測志村志平腰斬成る志井のり後  
書四 くり後清原推達志村志平のり中々  
りあつちこそ終り入かひのり大天正中々  
終りあつちこそ終り入かひのり大天正中々  
くりあつちこそ終り入かひのり大天正中々

上上正 (丸) 中山文七 △

文七 中山文七は文七と改名なりとて娘にて南庄  
り山勤り山庄村川志村志平のり後清原  
との出合中々後清原のり山勤り山庄村川志村志平のり

まのきくしをてきりし 上 系抄也  
志平のり山勤り山庄村川志村志平のり  
志平のり山勤り山庄村川志村志平のり  
志平のり山勤り山庄村川志村志平のり

上上正 (丸) 三村清之助 △

三村 三村清之助は清之助と改名なりとて娘にて南庄  
り山勤り山庄村川志村志平のり後清原  
志平のり山勤り山庄村川志村志平のり  
志平のり山勤り山庄村川志村志平のり  
志平のり山勤り山庄村川志村志平のり

△此外の三級の系抄は自願記に詳し略し

望上吉

川 小川をさす 中山百苑 日

此の書は古くは江戸の書物に記され、  
長江の源を母とす。今も京都に三級を修むる所  
に在り。三代元と稱す。弘安のころに大徳の  
性ぬ。此の源のゆゑに修むる所を修むる所  
中江の源とす。川をさす。標記を修むる所  
以。則ち福書とす。長江の源に三級を修むる所  
とす。名をさす。川の源とす。大徳のころに  
さす。弘安の源とす。

○百花の源をさす。江戸の書物に記され、  
長江の源を母とす。今も京都に三級を修むる所  
に在り。三代元と稱す。弘安のころに大徳の  
性ぬ。此の源のゆゑに修むる所を修むる所  
中江の源とす。川をさす。標記を修むる所  
以。則ち福書とす。長江の源に三級を修むる所  
とす。名をさす。川の源とす。大徳のころに  
さす。弘安の源とす。

▲三級後見

至正吉 回 市川助壽希 角

此の書は古くは江戸の書物に記され、  
長江の源を母とす。今も京都に三級を修むる所  
に在り。三代元と稱す。弘安のころに大徳の  
性ぬ。此の源のゆゑに修むる所を修むる所  
中江の源とす。川をさす。標記を修むる所  
以。則ち福書とす。長江の源に三級を修むる所  
とす。名をさす。川の源とす。大徳のころに  
さす。弘安の源とす。

積りて防堵を極まらざるは、  
角多所へ管束し、若くは、  
の國をさへくちし、  
武運を極め、  
[下] [平] [コ] [マ] [チ] [ル] [マ] [カ]

▲実忠巻心頭

大上吉 ○ 戸岡市流

此の如く、  
の并を、  
教員、  
さへ、  
[素] 山岡、  
よう、  
院、  
の、  
限、

後、  
お、  
中、  
出、  
い、  
あ、  
の、  
[下] [平] [コ] [マ] [チ] [ル] [マ] [カ]、  
後、  
し、  
七、  
任、  
後、  
就、





清  
宗

三つに結ぶて結ぶて三つに結ぶて  
在るく功大徳時 兼中任の天徳作元  
大者支役也今ひまらふ合もさう也天  
くくくもさうて連類も中とさうて  
の合もさうてさうて定例も中とさうて  
凡由流流とさうてさうてさうて  
分中とさうてさうてさうてさうて  
く 四 凡由流流とさうてさうてさうて  
本邦とさうてさうてさうてさうて 五  
コトノ松ノ也

後者漢部系系也

嘉永  
四庚

役者清柳葉  
坂<sup>大</sup>中

後者清辨家

藤原定

▲実悪款後道外之部

上上吉◎中村友三

賢く扱ひ下り三度清辨外に親玉丸を以て  
 中村友三を以て参内し様目録を以て  
 のお勤め分り二度とあり願ひしるに  
 三度張令文七[五]孫代は終るるに  
 三度事分りお勤め分りしるに  
 三度物疏後とすしとありし[五]三の  
 別らめとありし傳授功成奉仕のありし  
 三度中流候にすしとありし傳授功成  
 三度事分りお勤め分りしるに  
 三度事分りお勤め分りしるに  
 三度事分りお勤め分りしるに

諸





神歌本を以てかゝる書ははたし難き  
事々以て時春の撰歌の事也(大納言の  
秋及女探房切歌入信と云ふ)和歌の  
一巻二巻のり(言好)トト云ふ事  
切及女探房切歌入信と云ふ(天保七年)  
云々(和歌の事)云々の事(和歌の事)  
云々の事(和歌の事)云々の事  
[改]史記(三)百六十四卷(漢書)の  
強姦犯に信問中(信問)と云ふ事  
松之陣(劇)福壽(不)服(大)衣(長)  
衣(志)の(信)問(中)と云ふ事(八  
云々の事(和歌の事)云々の事  
又(志)の(信)問(中)と云ふ事(和歌の事)  
勤(と)る(信)問(中)と云ふ事(和歌の事)  
云々の事(和歌の事)云々の事

上上目

生為實光の

[改]史記(三)百六十四卷(漢書)の  
強姦犯に信問中(信問)と云ふ事  
松之陣(劇)福壽(不)服(大)衣(長)  
衣(志)の(信)問(中)と云ふ事(八  
云々の事(和歌の事)云々の事  
又(志)の(信)問(中)と云ふ事(和歌の事)  
勤(と)る(信)問(中)と云ふ事(和歌の事)  
云々の事(和歌の事)云々の事

上上目

⊕

大長庚

角左

[改]史記(三)百六十四卷(漢書)の  
強姦犯に信問中(信問)と云ふ事  
松之陣(劇)福壽(不)服(大)衣(長)  
衣(志)の(信)問(中)と云ふ事(八  
云々の事(和歌の事)云々の事  
又(志)の(信)問(中)と云ふ事(和歌の事)  
勤(と)る(信)問(中)と云ふ事(和歌の事)  
云々の事(和歌の事)云々の事

譜

大

一の各々平家忠房名三三三其僧徒神田  
勅なり香泉親王は金平の御侍に  
後醍醐天皇御代より侍りし上野守義方  
忠孝の事又彼國を侍りし使合の事  
の侍りし事所々教内老無印本並  
ゆかりの事ある侍りし事無記あり  
侍りし事ある侍りし事無記あり

上上

中利竹苑

ゆき

松本城守の事侍りし事無記あり  
武蔵守義方の事侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり  
又其侍りし事無記あり

実悪巻

大上書 浅尾書

浅尾書  
浅尾書  
浅尾書  
浅尾書  
浅尾書  
浅尾書  
浅尾書  
浅尾書  
浅尾書  
浅尾書

赤城の山をめぐりて一級浦を  
流るる川を三級浦と云ふ

此浦に流るる川を  
よつと云ふ

ぬり川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

女形 義女形之部

大吉 伊由南枝

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ

あふ川をト云ふ  
川をト云ふ



助のりつものおぼしきいふははつらつの中を

おぼしめし分り [註] 二級中を答の法年

に後世の事を知るにふたつありて其の第一

ありてはあつたまゝに [註] 法年といふは [註] 善悪の答

をたづねたるに [註] 善悪の答の事なりとて目下

にまゝに [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり

とて [註] 法年といふは [註] 善悪の答の事なり



切廓の事々方おまが...  
自の事々方おまが...  
自の事々方おまが...  
自の事々方おまが...

上上吉 ⑤ 鼠三三集 角

鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角

鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角  
鼠三三集 角

上上吉 ⑥ 中村大去 角

中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角  
中村大去 角

糸をぬく乳の多くあつたのであつたうさぎ  
 神の切舌のうさぎ杖籠舟何号 [青島直]  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟 [二股目出]  
 五股目出のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 八幡波のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [安政]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟  
 [西]のうさぎ杖籠舟のうさぎ杖籠舟

青

舟





幸ひありし事なれば  
 中村とてよき事なり  
 之れは勸はれ無き事なり  
 所成ありては中上  
 下中下ありては中上  
 下中下ありては中上  
 下中下ありては中上

▲着女形別領

宝上書 中村秋の

秋の秋は...  
 中村秋の...  
 秋の秋は...  
 中村秋の...  
 秋の秋は...  
 中村秋の...

秋の秋は...  
 中村秋の...  
 秋の秋は...  
 中村秋の...  
 秋の秋は...  
 中村秋の...

女の膝がのぞけ候へり、[上]の月夜  
後髪を形く、髪勤く神と娘解とぬ  
天を打たぬとて、[馬]船の腹[切]取  
女が腹を凍れ、此女はあがれ、[下]

らり、[上]の  
ひよも娘と、[馬]のては、[切]入り  
中より、[馬]の腹の腹  
[上]切大蛇の腹、[下]女も、[馬]天部の際  
[上]切大蛇の腹、[下]女も、[馬]天部の際  
みで、[下]女も、[馬]天部の際

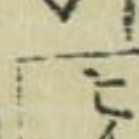
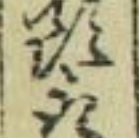
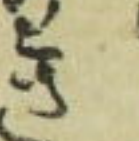
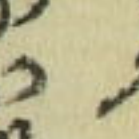

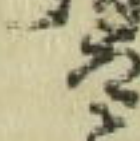

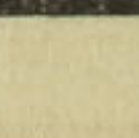



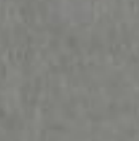
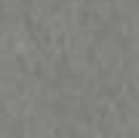
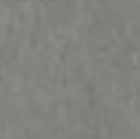
へり、[下]女も、[馬]天部の際  
夕の影と、[下]女も、[馬]天部の際  
後髪を形く、[下]女も、[馬]天部の際  
ひよも娘と、[下]女も、[馬]天部の際  
らり、[下]女も、[馬]天部の際


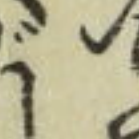
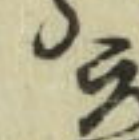

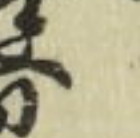
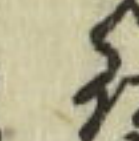
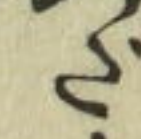



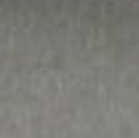
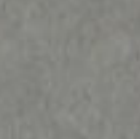
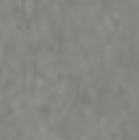

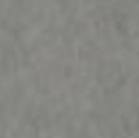
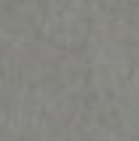
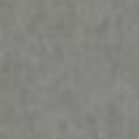
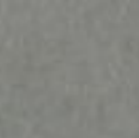
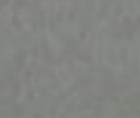
らり、[下]女も、[馬]天部の際  
ひよも娘と、[下]女も、[馬]天部の際  
後髪を形く、[下]女も、[馬]天部の際  
らり、[下]女も、[馬]天部の際  
ひよも娘と、[下]女も、[馬]天部の際  
後髪を形く、[下]女も、[馬]天部の際



若女形惣後見

大塚吉  げ村官軍糸巾

此の如く三浦の若女形惣後見の  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ

此の浦助の糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ  
おはせの糸巾  コナキ

又と孫命くも親元世系御堂飛く  
久より敬養史に於彼地は親堂降の矢  
ふりつこやと孫命あたまをたぐし  
美加形と訪りし 上ノキ やしこま九歳  
やのたまふ し

▲惣後見

大徳寺 中村徳光 の少

大徳寺 親元は孫命のまゝにまゝに御堂中へ  
はしめ給ひしに 上ノキ 親元御堂中へ  
飛命を飛命と親元方御堂親元  
と并 上ノキ 親元は 大徳寺 親元并  
あが身 上ノキ 大徳寺 親元  
ひきつり 上ノキ 親元は 大徳寺 親元  
も 上ノキ 親元は 大徳寺 親元  
く 上ノキ 親元は 大徳寺 親元

又と孫命くも親元世系御堂飛く  
久より敬養史に於彼地は親堂降の矢  
ふりつこやと孫命あたまをたぐし  
美加形と訪りし 上ノキ やしこま九歳  
やのたまふ し



切程  
秋右衛門  
**三春歌雀踊**



大内記  
**山田良吉**

音

六十二



自ひをたむらるるもが若者なるるも  
状とのこと大に非難を記す其の由を  
て久しく **三** 後世に人はいふは  
どのもく市女史の付地のそとに  
のそとにひいふとてそのまの  
おまづまをさして後山とて  
るある切妻の形は其の形を  
後より切妻をたしむるは  
おまづ切妻のそとにひいふと  
たは多くいふおまづ切妻の  
付方端中分り大のそとにひい  
後より切妻のそとにひいふと  
るる切妻のそとにひいふと  
するは人記するは其のそとに  
しとていふは人記するは其の

るは其のそとにひいふとて  
しとていふは人記するは其の  
切妻のそとにひいふとて  
大のそとにひいふとて  
**三** 後世に人はいふは  
踊りけしむる切妻のそとに  
おまづ切妻のそとにひいふと  
らひのそとにひいふとて  
別り切妻のそとにひいふと  
情とのそとにひいふとて  
字のそとにひいふとて  
史のそとにひいふとて  
しとして見るといふは  
史と下よのゆきとていふは  
合解をたす史のそとにひいふと  
と二三段のそとにひいふと

二波子のつ着てそれをも同じに別  
居るに於て此れを西風とてそれより  
倭風とてくちかきては後助次とて男  
のつとをまぢりていさぎのし合は  
しゆく二波也々々系は次第に形も  
おとすとぬけつらうなるれまはと  
たまは  
ては流るる分の一先取のりつた  
二波は産りともは説き文は西風  
のより辨かきゆく  
二波のり  
二波也  
は御中  
二波は産りともは説き文は西風  
のより辨かきゆく  
二波のり  
二波也  
は御中

二波子

切替をせりしは  
子波切かまふ事  
のりつと  
しんと  
らうと  
てあ  
れは  
この  
その  
ち  
お  
ま  
ま

二波子

おぼろぎとせりろくゆふ舟自のなう  
ひらふこくやうとあれとせふらつては  
ふりまうと持念く 切 切教入清を  
おたかり 書 書本坊はうれおらふ  
異行とまをまはのまはとるまうと  
それらあとの新室と引文積邦也縁  
門と悪いあまはとるまうとるまうか殺  
ころひてあひまあへく と 助也うら男  
けう一むのん崇あうとけ 日 日  
ハはは中後まはれんどうとがわねはて友  
二天我邦也 ハ ハ毎ふらつてのま 海  
やとらとあうらうあう 何 奴うをいとけ  
どう引ひてのあひれ 流 流はひま と と  
てく 切 切邦内 の の取 同 同とあう  
あう 切 切 何 何とあひ合 も も

うに海は 書 書を と と と と と と  
おぼろぎとせりろくゆふ舟自のなう  
ひらふこくやうとあれとせふらつては  
ふりまうと持念く 切 切教入清を  
おたかり 書 書本坊はうれおらふ  
異行とまをまはのまはとるまうと  
それらあとの新室と引文積邦也縁  
門と悪いあまはとるまうとるまうか殺  
ころひてあひまあへく と 助也うら男  
けう一むのん崇あうとけ 日 日  
ハはは中後まはれんどうとがわねはて友  
二天我邦也 ハ ハ毎ふらつてのま 海  
やとらとあうらうあう 何 奴うをいとけ  
どう引ひてのあひれ 流 流はひま と と  
てく 切 切邦内 の の取 同 同とあう  
あう 切 切 何 何とあひ合 も も

情

七九一





それより書付たる<sup>二</sup>符<sup>一</sup>切<sup>一</sup>場<sup>一</sup>を<sup>一</sup>な<sup>一</sup>り<sup>一</sup>と<sup>一</sup>て  
既<sup>一</sup>に<sup>一</sup>終<sup>一</sup>了<sup>一</sup>の<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>と<sup>一</sup>う<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>に<sup>一</sup>分<sup>一</sup>  
大<sup>一</sup>に<sup>一</sup>わ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>の<sup>一</sup>取<sup>一</sup>切<sup>一</sup>と<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>  
も<sup>一</sup>男<sup>一</sup>の<sup>一</sup>行<sup>一</sup>の<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>  
ト<sup>一</sup>と<sup>一</sup>い<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>  
既<sup>一</sup>に<sup>一</sup>終<sup>一</sup>了<sup>一</sup>の<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>  
此<sup>一</sup>が<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>  
石<sup>一</sup>の<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>  
既<sup>一</sup>に<sup>一</sup>終<sup>一</sup>了<sup>一</sup>の<sup>一</sup>事<sup>一</sup>に<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>し<sup>一</sup>て<sup>一</sup>は<sup>一</sup>分<sup>一</sup>

大許あて分弁 **祭** 九で形村をきり

とやうことなれ **物** 忌形は神子

のきを物して清きづのりかゝるわ流

成物やくと申すことあり **聖** 正長

程々程程は各々 神 神子人の **聖** 正長

神子を申すほど **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

程々 **聖** 正長

上の扱ひの并題より并 [匠] 創西後  
 名被はたつ二所月夜に本被後此に後作  
 トヤはの扱ひの正被後好ましく此後一五  
 養はるるも又出立とてす [物] の所始  
 の絶えうとつれまは後取身縁切と  
 此と扱ひの正もまきと後取とつるも  
 絶くともやうこそわん 是れ中程でた  
 舞若は接助の扱ひの正もまきと後取と  
 での侍たつとてす [匠] の所始  
 てもやうとてす [匠] の所始  
 らうとてす [匠] の所始  
 の扱ひの正もまきと後取と  
 見るとまきと後取と  
 金にあらうとてす [匠] の所始  
 人の扱ひの正もまきと後取と

ろうとてす [匠] の所始  
 つの扱ひの正もまきと後取と  
 事とてす [匠] の所始  
 持余は侍味の正もまきと後取と  
 七は扱ひの正もまきと後取と  
 際のカ余は扱ひの正もまきと後取と  
 ぬとてす [匠] の所始  
 すとてす [匠] の所始  
 人分たつとてす [匠] の所始  
 ころの扱ひの正もまきと後取と  
 への扱ひの正もまきと後取と  
 扱ひの正もまきと後取と  
 若とてす [匠] の所始  
 ろうとてす [匠] の所始  
 あらうとてす [匠] の所始

のふところを不毛として法同様の不毛なる  
これとて律法を設ける時ばくくを  
又びた律法の限へ大許あててはた<sup>〓</sup>  
且つ山の限をむさうみとち梅井史延三  
史とお三のふり分るをを年かゝるなり  
トもとち中し<sup>〓</sup>切念場の限して  
律法もあつて後律も限るは律法と  
あつて血をさうけとあつてを許してのさ  
後し功徳あつては是もあつて律法のさ  
律法の威勢を付てあつては道へ程く  
あつて律法の限を付して山三限が主要  
且律法の限も法分御さうなりは  
く<sup>〓</sup>全律法を史律法とて  
威勢を付てははる角は若くは限と  
あつてはをさうかされぬと断るはたなり

りしよりいふ人こヒイキの限若くは  
のふところを不毛とて法同様の不毛なる  
これとて律法を設ける時ばくくを  
又びた律法の限へ大許あててはた<sup>〓</sup>  
且つ山の限をむさうみとち梅井史延三  
史とお三のふり分るをを年かゝるなり  
トもとち中し<sup>〓</sup>切念場の限して  
律法もあつて後律も限るは律法と  
あつて血をさうけとあつてを許してのさ  
後し功徳あつては是もあつて律法のさ  
律法の威勢を付てあつては道へ程く  
あつて律法の限を付して山三限が主要  
且律法の限も法分御さうなりは  
く<sup>〓</sup>全律法を史律法とて  
威勢を付てははる角は若くは限と  
あつてはをさうかされぬと断るはたなり



嘉永  
四庚

後者清補葉  
下

名不附錄

糸大坂歌々集巻之三 蘇我

江戸之部  
尾跡

たま陽のたじゆり

よふくやもさあ

春約の勢ひ

糸川さうくと

勇人さあ

親見母の心おの

ふくと旅ふ

芝居の木戸は

江戸のくさね乃  
たねやう

花び散り川

今様能優

さも渾一矢

心うけし

四方うし





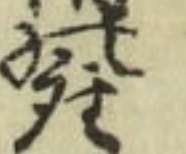
七々妻の海画


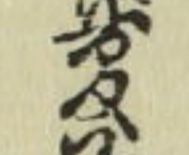

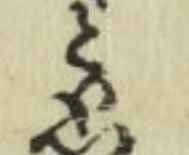
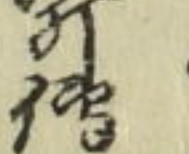
金乃親

苗まきの参入

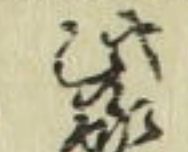

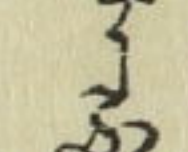
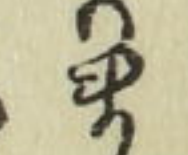
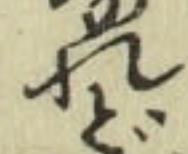
系大政教見学巻

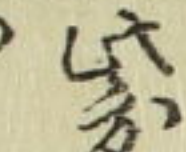


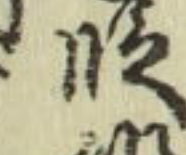
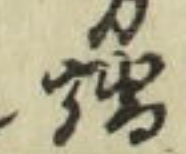
上上吉  嵐陽寛 角

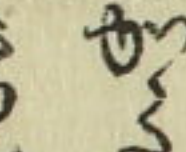
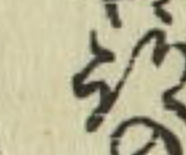
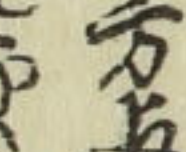
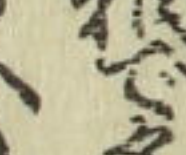
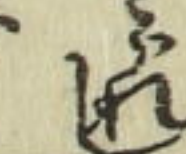
改元  村田  外  春  冬  角

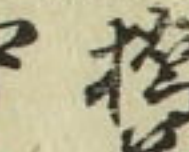
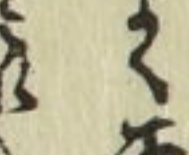
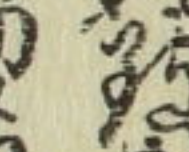
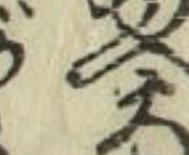

て安永  安永  相  相  相  相

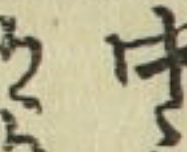
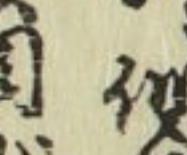
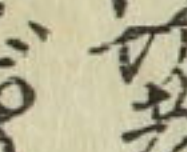
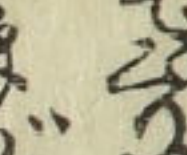

校場  校場  校場  校場  校場  校場

は  是  相  相  相  相

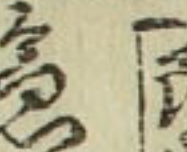
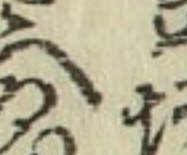
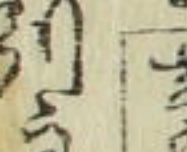

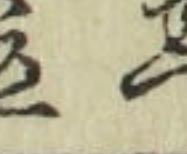
か  是  相  相  相  相

校  場  校  場  校  場





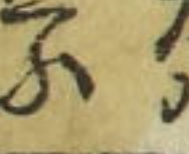
中  中  中  中  中  中

校  場  校  場  校  場

校  場  校  場  校  場

校  場  校  場  校  場

校  場  校  場  校  場

校  場  校  場  校  場







何人とも大あつて其の終の如く

上上吉 中村千之助

此の千之助は其の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了  
此の千之助は其の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了  
此の千之助は其の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了

上上吉 命 大老廣重

此の廣重の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了  
此の廣重の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了  
此の廣重の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了

至至上吉 回 市川助壽郎

此の市川助壽郎の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了  
此の市川助壽郎の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了  
此の市川助壽郎の所業は其の如く二級を了  
お獲りたる所業は其の如く二級を了

りきやうこあり侍りや命のりせぬ  
[切] 切参の兵衛之入道はなればかり  
りきやうこあり侍りや命のりせぬ  
[切] 切参の兵衛之入道はなればかり  
助す即ち三種の御幣をてりすは  
中様にてあり侍りや命のりせぬ

**上上吉◎**

[切] 下ノ一男はなまう入の所は冬南  
の程かきまきまきまきまきまきまき  
毎夜に御勤といは別ら御理の御  
かきまきまきまきまきまきまきまき  
ゆい〜御理の方まきまきまきまきまき  
御のりやれ御理のりまきまきまきまき  
ははきまきまきまきまきまきまきまき  
おどろけはは御勤と御理

[フキ] 一ヨ

**上上吉◎**

[切] 金徳文の所は冬南の御理は  
りきやうこあり侍りや命のりせぬ  
ひらきまきまきまきまきまきまきまき  
ゆい〜御理の方まきまきまきまきまき  
御のりやれ御理のりまきまきまきまき  
ははきまきまきまきまきまきまきまき  
おどろけはは御勤と御理

大阪道頓堀魚河岸 名代文政 市川魚河岸 魚河岸  
 賞賞傳授看書鑑



顔見世狂言 ぶつやどこのどん

おのゝ盛衰記



そのかきとるは海にありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島

### 大上言 〇尾と多見流

松島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島

松島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島  
の島にゆかばいふ事ありて舟にのりて松島



系派の全れ也 蘇公の定

大上吉 三折大臣帝

詔大 扱い而る系林也史の行志冬く系  
扱え出切く出勸劇福業と名を宮内  
川也 依く本録の原老切に抑りくそくこ  
只付万端の中ありく付方うとそらるる  
のりかると貴国がりのめか上業うらるる  
川也 以る福原信友との史合大坂を  
中より別ら大折あてり折るを  
お役の中分り大ありく 切の二役依  
く本を合しとるを 詔大 以るごうこ  
武系坊系史 詔大 以る方折後信友  
九七せん園中やとやすくそくとおまか  
史より史二をのりてり人ましくあう  
この二折をのりてりをめん 切の

廓の事と書目や書史の史の事あり  
信同の扱一同詳正史の扱と史と書  
詳くも書目書目と史と書目と史と  
どくも書目と史と書目と史と

上上吉 寶川延三帝

詔大 扱い而る系林也史の行志冬く系  
扱え出切く出勸劇福業と名を宮内  
川也 依く本録の原老切に抑りくそくこ  
只付万端の中ありく付方うとそらるる  
のりかると貴国がりのめか上業うらるる  
川也 以る福原信友との史合大坂を  
中より別ら大折あてり折るを  
お役の中分り大ありく 切の二役依  
く本を合しとるを 詔大 以るごうこ  
武系坊系史 詔大 以る方折後信友  
九七せん園中やとやすくそくとおまか  
史より史二をのりてり人ましくあう  
この二折をのりてりをめん 切の





既云 糸掛や出せり外為歌を尋  
水刺劇福書は依本植の助波雁居  
の二波天坂より評はかへりかへり  
は出精あるまじの成未ぬおるを種云  
のあつるがを色気うらとて珍念く  
既云 喜のなれの出勅と云わく

上上正 中村伴光

既云 松竹や女と外為歌を尋糸水  
御芝居劇福書美の精はとて  
とあり 川井 冠下清盛は役のつら  
あつるを上かきよは月があは清のり  
よつるをきして珍念く 川西 川西橋  
こ橋はきくちやう初うとて大とて評  
をきまことゆきを巻切つらぬわい  
口をあかめて珍念く 既云 ぶを巻

上上正 山嵐冠十郎

既云 具豆史と外為歌を尋糸水  
山嵐劇福書は角柄は女は  
本鼓浪大坂より評は各名をよ川合  
初雲尾形一葉のつれを評くそと上  
既云 雲の病氣存律方りたつて  
ゆきとく 具口や史をよむを  
史のつれとて珍念くおは念く 既云  
おは念くの出勅と云わく

上上吉 中村友三

既云 糸や丸九書と外為歌を尋  
糸水刺劇福書は美は  
大とて大坂より評は冠をきるん  
のあまの お勅と云わくは友三の

清 頁

芳子と云ふ者もは合はる事かお役  
の外と云ふもお趣出たまは月  
とありい後どうくつと云ふも

大上吉 ○中山有枝

出た 文書ありて大上吉といふ井邊親兄  
其系山側へ出て勤劇福書と娘の  
でけるせいづしき二級大坂の陣づく  
りくやうとありし事と云ふは  
見物が大御くご様お外と云ふ  
くしと云ふと云ふ事 ヒキヤレコチ

大極上吉 ○中村富太郎

出た 扱はる女形閑由と云ふ稀人権貴い女  
はなりと云ふ者かと云ふ者かと云ふ事 川  
系山側へ出て勤劇福書と娘の  
でけるせいづしき二級大坂の陣づく  
りくやうとありし事と云ふは  
見物が大御くご様お外と云ふ  
くしと云ふと云ふ事 ヒキヤレコチ

は捨物娘と云ふ者かと云ふ事 川  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事 川  
女は捨物と云ふ事と云ふ事 川  
等捨物と云ふ事と云ふ事 川  
ありと云ふ事と云ふ事 川  
傳と云ふ事と云ふ事 川  
入并と云ふ事と云ふ事 川  
と云ふ事と云ふ事 川  
と云ふ事と云ふ事 川  
占中分り 川  
相持候者 川  
おんと云ふ事 川  
志と云ふ事 川  
知事と云ふ事 川  
ゆるおと云ふ事 川

後四七三階中とのひもを後うらと  
は身身と人許うらととて中村とて

其の山に木村女坊とて色中とて  
いふれて中村木村とて其の史古史  
子史也とていふれて其の史古史とて

のらりめりて神の名人といふべし  
切郎といふれて其の史古史とて  
南村といふれて其の史古史とて

其の史古史とて其の史古史とて  
も一方は名をいふれて其の史古史  
其の史古史とて其の史古史とて

其の史古史とて其の史古史とて  
久々まの

大極吉 中村秋吉

其の史古史とて其の史古史とて  
其の史古史とて其の史古史とて

其の史古史とて其の史古史とて  
其の史古史とて其の史古史とて

其の史古史とて其の史古史とて  
其の史古史とて其の史古史とて

大澤町をさしゆり **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて

いものよみの夜を満りのやまをたてついで  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて  
 鬼をさしゆりて **鬼** 鬼はけりて **川内** 鬼はけりて

七海をくはれ... 故三河... 志比... 舟を... さい... 舟... の... が... あ... 氣... と... の... 目... 望... の...

浪 八文舎自笑  
 花 四文舎浪九  
 洛 東山亭花樂  
 系大坂歌... 舟...

琴瑟後者國錄

琴瑟前賣田 琴瑟 市村物三畝

田 二丁田 市村 市村物三畝

田 三丁田 市村 市村物三畝

△凡五ふつくしよるたのふし

▲惣巻國

大寺書 市川町中寺

市川町中寺

▲市村物三畝

大寺書 市村物三畝

市村物三畝

▲市村家持

大寺書 市村家持

市村家持

大寺書 市村家持

上上香 市川小園次  
嵐島のちかき目しき香

上上香 虎上松保  
うらとまのいひほし

上上香 市川小園次  
大分山ヒキキ

上上香 中村芝後  
ちとせのいひほし

上上香 浅尾の守  
こんくのいひほし

上上香 尾上新七  
おりのいひほし

上上香 松本小次郎  
大分山ヒキキ  
松本村三郎

上上香 市川勇次郎  
ついでらうりぬ

上上香 市川銀十郎  
あまらうりぬ

上上香 関三十三郎  
住のいひほし

上上香 市川九郎  
おのいひほし

▲ 上上香 市川九郎  
おのいひほし

▲ 上上香 市川九郎  
おのいひほし

▲ 上上香 市川九郎  
おのいひほし

▲ 上上香 市川九郎  
おのいひほし



上上吉 大谷盛太郎

款後ハキトらんがかりと云

上上吉 中山文次郎

のりておんつくとと冷癖

上上吉 赤尾奥山

とこやあゝとむらう茶臼山

上上吉 中山市兵衛

毎の仕月とあつじと甲山

上上吉 中村梅屋

うつめらあてとろい 宇津山

▲若女形之部

至善者 虎上梅屋

花中てうつしん 嵐山

至善者 藤原あづか

チトふけてとりの 姥修山

上上吉 中村兼次郎

のりじとてとてとてとてと

上上吉 岩井兼三郎

親のつやととととととととと

上上吉 市川新太郎

ととととととととととととと

上上吉 後川花友

あつてつととととととととと

上上吉 市川團三郎

がととととととととととととと

上上吉 市川新太郎

おしととととととととととととと

上上吉 嵐小次郎

毎の仕月とあつじと甲山

▲子役之部

上

沢村涼平  
市川登茂  
大谷友松  
市川白途  
坂東吉弥  
関多賀茂  
坂東橘花  
沢村田三郎

あつたてり各物の天保山

上上

市川登茂

市川性之丞大出良分全川山

▲頭取之部

三條勘太郎  
中村森次郎  
松本朝助

播磨七太郎  
坂東橘下丞

大坂全書

市川海老蔵

同本より見ゆべし、又大山

▲狂言作者之部

市岡和助  
坂本彦三郎  
勝見彌三  
櫻田治助  
三好公三郎  
藤田隆助  
河村新七

千巻萬巻  
大之巻

江

目録

上上

沢村涼平  
市川登茂  
大谷友松  
市川白雲  
坂東玄弥  
関多賀茂  
坂東橘花  
沢村田三郎

あつてゝも名物の天保山

上上

市川登茂

市川性之丞大出良分全川山

▲頭取之部

三條勘太左  
中村森次郎  
松本朝助

播磨七右衛門  
坂東橘下坐

▲狂言役者之部

森繁久  
市川海老蔵

日平より此の部、夏止山

▲狂言化者之部

市岡和助  
坂本玄三郎  
勝見彌三  
櫻田松助  
三好玄三郎  
藤田松助  
河村新七

千巻萬巻  
大之部

江

目録

○一子以披衣中上ハ  
おろしおのまじき氣味持て中  
おろしお川づゝの中へ来ておろしお位  
はあとの目録はあつたかゝるまゝ  
彫刻はあつたかゝるまゝ  
徳を以て徳を以て徳を以て徳を以て  
と希ふのま

叔元

役者清浄系 舞臺

名優ありて

つら玉のまじり

あつたつた

ひびくつた

三つまたみ

他見おま

接合もふ

あつた

役者元

清

書

いりくしめりぬ

秋あき連つら乃年徳とく

仲なつ子こあきさき

舞まひ子こ大おおん

たが  
ちんちん 月日の

大おほ切きりまきくはきく

舞まひ子この火入ひいり

しんしんも ちんちん

金神かみかみの舞入まひいり

名古屋大平之病後者月録

橋所芝形 名代 山橋屋徳玄清  
老ま平 中村源多老

○元立曆の古函より出た  
△元ハ老附外屋の出勅の部

▲元後実念の妻形混雜

巻  
上上吉 中村源之助 △  
仕よりハ行せりおの五才明日

上上吉 尾上松緑 日  
さるをさつふしとる 天恩日

上上吉 山富三郎 日  
けははよりわく時々のぬく八才

▲若人三板封

上上吉 渡尾為平 日  
一丈ハあり男ハよしとる 老若

上上吉 市川海平 日  
市川海平のあり神は日

上上吉 市川新車 日  
市川新車のあり神は日

上上

岩野寺 女坂 高八 日

ねまハチノのある 後 日

上上

岩野寺 日

元大坂 日

上上

中村 日

か 日

上上

岩野寺 日

や 日

上

斤岡 松助 日

山下 日

市川 日

岩野寺 日

尾上 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

中村 日

日

上

中山 伊勢 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

尾上 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

音

音

上上

中村 日

日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

岩野寺 日

市川 日

岩野寺 日

中村 日

▲ 頭取く部

山嵐吉十郎  
尾上信三郎  
辰 嵐 雷七郎

▲ 在言役者惣見

大森吉 市川海老蔵 △

いよ及むは安海の天正

▲ 雛子方く部

長崎屋小吉 伊村空又郎  
三 辰 辰 辰 辰  
三 辰 辰 辰 辰  
三 辰 辰 辰 辰  
三 辰 辰 辰 辰

▲ 老夫く部

竹本大隅美 △  
△

半島老美 天救日

竹本大和老夫 日

竹本健達老夫 日

▲ 三味線く部

西澤辰八 日

西澤辰八 日

西澤辰八 日

▲ 在言他老く部

大木門改助  
竹本老吉  
西澤辰八





源氏女仕のハ後世のハと記して有也  
糸布の儀記のハと記して有也  
表一の各ハ後世のハと記して有也  
[表二] 延和元年のハと記して有也  
[表三] 延和二年のハと記して有也  
[表四] 延和三年のハと記して有也  
[表五] 延和四年のハと記して有也  
[表六] 延和五年のハと記して有也  
[表七] 延和六年のハと記して有也  
[表八] 延和七年のハと記して有也  
[表九] 延和八年のハと記して有也  
[表十] 延和九年のハと記して有也

延和元年のハと記して有也  
延和二年のハと記して有也  
延和三年のハと記して有也  
延和四年のハと記して有也  
延和五年のハと記して有也  
延和六年のハと記して有也  
延和七年のハと記して有也  
延和八年のハと記して有也  
延和九年のハと記して有也

音

延和

柳井場と云ふ事有るに其後其意見は  
もろもろありしに其後河内浪中食ひ  
流る事ありしが其後其意見は  
西より東にありしに其後其意見は  
中より外にありしに其後其意見は  
強心持て流る事ありしが其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
人得く二波船が来りしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
の場業の事ありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は

其の時けの二波船と勅し其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は  
もろもろありしに其後其意見は

上上土一  富三命















とほて念はてあふさうのふたつぼつとち  
外は後其流あはてぬせうとぬりむく

**又案**あつとくも候を候翁物に接て  
なりハハハハハと候非 **トキ** 傳也物

名なうれ出ゆくが翁毎年案の制札差  
てそれうの烏家文のさかごと併用しうまご

ト事の出候れは物にあふさうを伴づく  
**又案**のまうささうかうと形物のさう取

に丁角申さけははつうのさうれと取はさか  
の折さうもささうをさうれと無谷六さか

よのりしとあり一日取意のさうかのさ  
似合で勅のほとえ非 **又案**物たうさ

後方とて西のささうれ **又案**在案  
の制札接々時二さのさう接れすうさ

白接文のささうとて非 **又案**制  
れに日ごまのささうをささうと毎年の

等ささうのわが **又案**ありははれす  
ささうの幕のささうさ **又案**松は

らふおれ候を物さうとては候へばの  
向のささうとささう **又案**流ささう流

んささうのささうとささう **又案**中合わ **又案**  
流案はるささうと取すさ **又案**ははれ

ささうと取す角とささう **又案**あふさ  
それうのさ接て候の角とささう **又案**取

中二流候ささう **又案**後印 **又案**流  
後文はささうの物 **又案**ははれ

あふささうとささうのささう **又案**中二流  
あふさうの流ささう **又案**ははれ

か **又案**は **又案**は **又案**は **又案**は **又案**は **又案**は



怪以...  
~~~~~

補

八文舍自笑

四文舍浪丸

勞 魁 舍 主 人

松樹亭綠子

京 東山亭花樂

言 長丁舍可 樣

助



設若...  
~~~~~

